

せいそう

## 若い人になんて言うの？



丸浦世造

私は、現在建設事業に携わっております。幼少の頃は、電車の運転手とかプロ野球の選手とか言っていた記憶がありますが、家業でもありますので、物心付いた小学生の後半からはこの道に進むつもり、いや「定め」を感じておりました。

中学2年生の時、自分が大人になった時の姿をイメージしたことがありました。発端は漫画「男一匹ガキ大将」の影響でした。私は当時野球少年だったのですが、主人公の戸川万吉は中学生ながら大人を相手に戦っておりました。「仕事」ということに目覚め、自分が大人になったら社会に影響のある仕事をしたいと思ったものでした。当時は昭和47年、田中角栄総理のもと、公共工事が社会の重要政策であり、家業の会社が学校建築や国道の改良工事等によく見かけたり、また収益もそれなりに上がっていたことと思いますが、地域貢献も盛んであったことと思います。故に大人の会話の中に自社や父や祖父の名前が「いい意味」で出ているのを見るにつけ聞くにつけ、自分の将来の仕事として意識の中で確立されたと思っております。

高校1年生の時、国語の授業で「自分の将来について」を文章にして、かつみんなの前で発表するという機会がありました。私は前述の延長線上の中で、高校受験も成功したので、意気揚々と「建設事業をとおして世の中で頑張りたい」ということを切々と文章にし、また皆の前で、得々と語った記憶があります。しかし、その時、国語の担当の先生が評価として、「今こういう時代だからこそ、建設事業の中で力強く生きていくのもいいかもしれない」と言われました。私は「あれっ何で？」と思ったものです。日が当たり影響力のある意気揚々とした将来を語ったつもりなのに、「大変だけど、頑張っ」みたいなことを言われ、ショックを受けた記憶があります。実は、当時は昭和49年オイルショックの真っ只中であり、確かに厳しい目線を向けられていたようでした。後でわかったことですが、自社も政変等で（当時は、知事や町長によって受注が大きく左右されていた）苦勞をしていたようでありました。しかし、私の将来像が揺らぐことは全くなく、建設事業を通して社会に影響を与えられることを夢見て過ごしておりました。

大学時代は、東京ではありましたが、土木工学科であり空手道部に入部しアザだらけになり、酒も覚え泥臭い青春を謳歌しつつ、時代小説を読みふけりながら

益々自分の将来は建設事業の中にあることを疑うことはありませんでした。その頃は「天職」という言葉さえ使っていたことを覚えております。サラリーマン時代においては、建設事業の中に具体的に身を置き、怖い下請けのおじさんやダンプトラックの運転手に怒鳴られながら、ドロドロした仕事の中でありましたが、これまでの夢とは違って「もの造り」の難しさや楽しさや喜びを味わった時代でした。つまり家業を継ぎ大きな夢を追うのではなく「もの造りそのものの仕事」に没頭したいという気持ちになり、私に「そろそろ帰って来い」と説得に来た父親とよく大喧嘩をした時代です。しかし、上司からも説得されてしぶしぶ家業を継いだことが懐かしい思い出です。

さて、それから25年が経ちました。今私の身の回りにいる中学生、高校生、大学生、もしくは若手の技術者は建設業界をどう見ているのでしょうか。いや、私がもっと怖いのは、その人たちに自分がどう語れるのかということです。15年程前の新卒採用面接の時はとても熱く語っていた自分がいましたが、今は現状だけでなく未来についても「魅力」を語りきれない自分を感じます。どうしてしまったのでしょうか。「若い人になんて言うの？」正直な気持ちです。

ところが、私自身は未来に関して悲観的な気持ちは毛頭ありません。何故なら、建設業界や建設事業にしがみつくつもりがないからです。しかし、廃業・転業するつもりもありません。自社のモットーは「お役立ち」です。お役立ちできる地域で、自社のお役立ちを期待するお客様に、お役立ちをしようとする社員たちと柔軟に対応していけばそれでよいと思っております。結局わけのわからない建設会社らしくない会社になってしまうかもしれませんが、お役立ち＝自社の存在価値＝会社の存続だと覚悟を決めております。

話を元に戻しますが、そうは言っても「お役立ち」だけでは、若い人はピンと来ないと思いますし、どこよりも厚い待遇で迎えることも出来ません。しかし、社会資本整備の役割は終わっていませんし、これから防災や既存構造物の更新のために若い力が必要です。ここに何か「キラリと光る」若い人が夢を持てる言葉を見出さなくては。そうしないと、ある日誰もいなくなってしまうようで…